



ごきしちどうず とうさんきしょうのず  
五畿七道図 東山奇勝之図  
ふちがみきよっこう  
寛政8年(1796) 淵上旭江(画)  
岡山県立美術館蔵

「五畿七道図」は日本各地の名勝旧跡を緻密に描いた作品で、大坂の廻船問屋の和田隆侯わだ りゅうこうの求めによって制作されたものです。全484図、全16帖からなる大規模な作品で、このうち「東山奇勝之図」に「美濃岐阜」と題した景観図が含まれます(上の写真)。本図は、長良川右岸より岐阜町を描いたもので、場面右側に中河原新田なかがわらしんでん、左奥に金華山きんかざんを配置します。中央の微高地ごんげんやまは権現山でしょうか。

作者の淵上旭江かみやまさかは、上山坂村(今の岡山県玉野市)の農家の生まれで、全国各地を遍歴した絵師です。寛政11年(1799)から享和2年(1802)にかけて刊行した『日本勝地山水奇観にほんしょうちさんすいきかん』は、「五畿七道図」をベースに制作されました。

旭江が描いた美濃の風景は、岐阜町、太田川、落合橋、観音坂の4地点であり、当時から金華山と長良川が美濃の名所として認識されていたことがうかがえます。全ての風景を旭江が実見していない可能性も指摘されていますが、元図となるような絵画作品は見つかっておらず、旭江が実際に岐阜町を訪れた可能性は高いでしょう。

(「清流の国ぎふ」文化祭2024関連特別展「つなぐ」にて展示)

## 特別展

「清流の国ぎふ」文化祭2024 関連特別展  
つなぐ

2024.10.12(土)～11.24(日)

おほちのさまは平城のはしめもかくやと思ひや  
られつゝ

これは、天正元年（1573）に岐阜を訪れた兔庵とあんという人物が書き残した『濃路紀行』のうじきこうの一節です。当時は織田信長が岐阜を治めていた時期で、城下町の整備も進み、町の様子については在りし日の平城京を彷彿させるほど立派だったとします。兔庵をはじめとする旅人たちの紀行文や絵画作品は、当時の岐阜を知る上で重要な資料といえるでしょう。

本展では、旅人たちが残した記録から岐阜の歴史を紹介するとともに、「清流の国ぎふ」文化祭2024のキャッチフレーズである「ともに・つなぐ・みらいへ～清流文化の創造～」の「つなぐ」をキーワードに、彼ら旅人たちと岐阜の人たちとの交流に着目します。

### プロローグ つながる道



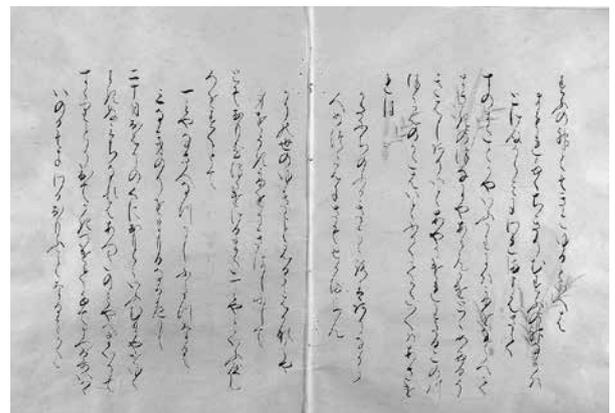
重要文化財 中山道分間延絵図 9巻  
(完成：文化3年（1806）東京国立博物館蔵)  
Image : TNM Image Archives

岐阜には、古代には東山道とうさんどう、中世には東海道とうかいどう  
きょうかまくらおうかん なかせんどう  
(京鎌倉往還)、近世には中山道と主要街道が通  
じていました。

左下の資料は中山道を描いた絵図で、江戸幕府11代将軍徳川家斉とくがわいえなりに献上されたものです。掲載箇所には、加納宿かのうが描かれ、家々が連なっている様子が分かります。天保14年（1843）の調査によれば加納宿には805軒の家があったとされ、この絵図からも宿場町として栄えていたことがうかがえます。

### I 岐阜を訪れる

街道を通して岐阜には様々な人々が訪れました。例えば、弘安2年（1270）に京都から鎌倉まで旅した阿仏尼あぶつには、美濃・尾張を通る道中、墨侯すのまたで長良川を渡っています。川に架かった船橋を「いとあやうけれ」とし、橋を渡る時の心もとない心境を、はかない浮世の旅路にかけて「かりの世の ゆきゝと見るも はかなしや 身をうき舟を うきはしにして」と詠みました。



#### 十六夜日記 上

(原本：弘安3年（1280）写：江戸時代、17世紀  
原本：阿仏尼（筆）国文学研究資料館蔵)

### II 岐阜でつながる

では、岐阜を訪れた旅人たちと岐阜の人たちとの間でどのような“つながり”があったのでしょうか？例えば、万里集九ばんりしゅうきゅうの詩文集「梅花無尽蔵ばいかむじんぞう」によれば、文明13年（1481）に美濃を訪れた雪舟せつしゅうは、滞在中に多くの作品を制作したようです。残念ながら、「梅花無尽蔵」記載の作品は現存しませんが、「山寺図」（模本）により美濃における雪舟の画業の一端を知ることが

できます。本作は、春岳（<sup>さいとうみょうじゆん</sup>斎藤 妙純の弟）の  
<sup>ようぎあん</sup>楊岐庵（今の山県市）の新築祝いとして描かれ  
 たと考えられているもので、原図は江戸時代に  
 焼失してしまいました。「梅花無尽蔵」の記述  
 や「山寺図」からは、美濃の人びとに請われ、  
 作品を制作する雪舟の姿が想像されるでし  
 ょう。



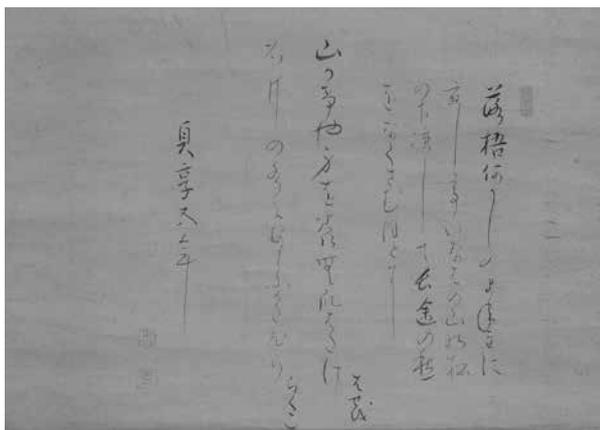
山寺図（模本）

（原本：文明13年（1481）頃 写：寛文12年（1672）

原本：雪舟（画） 写：狩野常信（画）

東京国立博物館蔵）

Image: TNM Image Archives



「山かげや…」懷紙

（貞享5年（1688）松尾芭蕉（筆）岐阜県美術館蔵）

貞享5年（1688）には、<sup>まつお ばしやう</sup>松尾芭蕉が岐阜町を  
 訪れました。これは、岐阜町の町人・<sup>やすかわらくご</sup>安川落梧  
 らの招きに応じたもので、滞在中には落梧邸に

て「山かけや 身を養む 瓜はたけ」と詠んで  
 います。落梧は、この句にちなみ「瓜畠集」の  
 編集を志しました。病魔に倒れ実現すること  
 はありませんでしたが、落梧にとって芭蕉訪問が  
 どれほど大切な出来事であったかがうかがえ  
 ます。

## エピローグ 明治天皇の<sup>じゆんこう</sup>巡幸

本展の最後では、エピローグとして明治11年  
 （1878）の明治天皇の巡幸を取り上げます。

下の椅子は、巡幸時の小休所に指定された鏡  
 島村の上松家に伝わるもので、巡幸にあたり新  
 調されたものです。雨による予定変更により、  
 この椅子が使われることはありませんでした  
 が、こうした資料からは、岐阜の人びとが天皇  
 を迎えるために、いかに心を砕いていたかがう  
 かがえます。

なお、巡幸に際して、天皇が鶺鴒を観るこ  
 とは無かったものの、鶺鴒に関する書籍や鮎が献  
 上されました。また、右大臣の<sup>いわくらともみ</sup>岩倉具視が鶺鴒  
 を観覧しており、皇室と鶺鴒が結びつくきか  
 けとなったといえるでしょう。その後、明治23  
 年（1890）に鶺鴒は宮内省の管轄に置かれるこ  
 ととなり、鶺鴒匠も宮内省所属となりました。



椅子

（明治11年（1878）個人蔵）

## 研究ノート

### ちすいおう やまだせいざぶろう 治水翁・山田省三郎と教育 ～前半生の事績をたどる～

松島 裕大

美濃国厚見郡  
佐波村（現・岐  
阜市柳津町）出  
身の山田省三郎  
（1842-1916）は、  
県会議員・衆議  
院議員を歴任  
し、木曾三川治  
水事業に尽力し  
た人物である。



山田省三郎肖像  
（岐阜市歴史博物館蔵『養老田趣意書』）

「治水翁」とも呼ばれた彼の功績については、彼の生前に発行された事績書『養老田趣意書』<sup>(1)</sup>のほか、『柳津町史 佐波編』<sup>(2)</sup>や今津利治氏の研究<sup>(3)</sup>などを通して、詳しく知られている<sup>(4)</sup>。

省三郎の治水家としての活躍は、明治12年（1879）の県会議員当選後が中心となるが、それは30代後半以降、すなわち彼の後半生の出来事と言える。一方、彼の前半生や治水以外の分野での活躍については、上記の諸文献でもほとんど触れられていないか、ごく簡単に紹介される程度に留まっており、未だ十分に論じられているとは言えない。そこで、本稿では、郷里・佐波村における教育者としての活動を中心に、彼の前半生の動向について探っていきたい。

明治5年（1872）に、明治政府が「学制」を発布すると、全国で学校開設に向けた動きが加速していった。佐波村では、明治6年3月8日に尚友義校と呼ばれる学校が開校している。『柳津町史 佐波編』には、尚友義校の前身として、

省三郎が自宅を仮小学校とし、一切自費で数十名の児童を教えていたことが記されている。

一方で、省三郎は、尚友義校の設立についても中心的な人物の1人として関わっていた。佐波村の豪農・青木久衛（実業家・原三溪の父、地域の有力者として尚友義校の主者などを務めた）が残した日記「諸事日記帳」（以下、「日記」と略す）<sup>(5)</sup>には、明治6年2月23日に、省三郎が久衛のもとを訪れて、学校のことについて何らかの相談をしている様子が確認できる（「今日山省参り候間、学校之儀申談、曾平・弥左衛門等呼遣候て、早速取立候様ニ申聞候、」）。また、尚友義校が開校した当日（同年3月8日）の「日記」には、省三郎が教師の1人として名を連ねていることが確認できる（「今日観音寺本堂ヲ学校ニ致候て、今朝ハ取掛候間、繁平・省三郎・鏡平・僧泰ヲ教司と相定、手習人今日四五拾人も上り候、」）<sup>(6)</sup>。こうして、明治6年の尚友義校開校とともに、省三郎は同校の教師として教壇に立つこととなった。

それでは、省三郎は尚友義校において、一体何を教えていたのであろうか。前述の青木久衛の「日記」を読み進めていくと、明治6年（1873）9月12日条に次のような記述がある。

「今日拙者、省三郎と繁平色々入組、繁平学校え出不申候間、拙者繁平方え行申諭候処、已前之様ニ省三郎セ話ヤキ候て誠ニ面目ヲ失候事出来仕候間、究り御附被下候ハてハ得出不申と申候間、」

これによると、尚友義校の教師の1人である小川繁平と省三郎の間でもめ事があり、繁平が学校に出勤しなくなってしまったようである。それでは、そのもめ事とは一体どんなものだったのだろうか。問題は9月27日に解決する。

「助教繁之助・省三郎と入組も片付、句読ハ繁之助、筆道ハ省三郎と申筈ニ相成候、」

この記述から、両者のもめ事とは、担当科目

に関わるものであったことが想像される。繁平の教授内容について、省三郎から何らかの「世話ヤキ（世話焼き）」があり、繁平は面目が潰されたと感じたのであろう。問題の解決策として、両者の担当科目がきちんと分けられたようで、以後、繁平は句読（読み方）を、省三郎は筆道（書き方）を担当することとなった<sup>(7)</sup>。

以上より、省三郎は尚友義校において筆道を教授していたようだが、その他にも学校の運営などにも積極的に関わっていた様子が、青木久衛の「日記」により確認できる。例えば、明治6年（1873）10月25日には、尚友義校の開業願書<sup>(8)</sup>を県に提出するため岐阜へと赴いている（「今日省三郎ハ岐阜え学校開業之願ニ行候、」）。

なお、この開業願書には、歳入・歳出の内訳や教員一覧・塾則などが記載されているが、このうち塾則については省三郎が取りまとめたようである（「日記」明治6年10月19日条・「学校之学則ヲ見セニ省三郎相見得候、」）。

その後、尚友義校は、明治7年（1874）に同じ佐波村内の宿命義校と合併することとなり、新たに佐波学校が誕生した。翌8年になると、省三郎は青木久衛らと共に同校の学校取締の役に就いており<sup>(9)</sup>、引き続き学校運営にも深く関与していくこととなる。明治9年には、それまで校舎として借りていた観音寺に代わり、新



明治10年ごろの佐波学校  
（宮内庁書陵部蔵『岐阜県師範学校並同県下小学校写真帖』）

たな校舎が新築された。建設工事は同年春ごろより本格化し、同年9月8日に新築校舎の使用が開始されるが（「日記」）、農繁期でもあることから、省三郎自ら建築作業の手伝いをする場面もあったようである（「日記」明治9年6月24日条）。

〔拙者<sup>(久衛)</sup>学校え一寸行候処、石屋倉吉参り、学校玄関之前ヲ積居候処、誠ニ田植前ニていそがわしく候間、壺人も手伝無之ニ付、久之丞行、省三郎土持ヲ致居候間、拙者も暫ク石屋之手伝致候、〕

以上のように、省三郎は、「学制」発布以降の近代教育確立期において、地元・佐波村の教育事業に尽力した。そして、こうした功勞に対し、明治16年（1883）には、文部省より四等賞が授与されている（『養老田趣意書』4頁）。

なお、このほか省三郎の前半生の活動として、青木久衛の「日記」からは、地租改正にかかる佐波村での地検への関わりなども確認されるが、それらについては今後の検討課題としたい。

- (1) 戸崎増太郎『養老田趣意書』（1901年）
- (2) 『柳津町史 佐波編』（1972年）
- (3) 今津利治「山田省三郎と木曾川治水」（『岐阜県博物館調査研究報告 第13号』、1992年）
- (4) このほか彼の事績について紹介した文献に、大橋彌市編『濃飛人物と事業』（1916年）、山田貞策編『宝暦治水薩摩義士事蹟概要』（薩摩義士顕彰会、1932年）などがある。
- (5) 岐阜県歴史資料館蔵。なお、明治14年までの日記については、『岐阜大学教育学部 郷土資料』11～13・16～19に翻刻文が抄出・掲載されている。
- (6) その他の人物、繁平・鏡平・僧泰については、それぞれ小川繁平・広江鏡平（佐波八幡神社宮司、医師）・木蘇岐山（観音寺住職・木蘇大夢の次男）を指す。
- (7) 明治6年10月に県へ提出された「小学義校開業願書」（『柳津町史 佐波編』（1972年）253-255頁）によると、当時の尚友義校には教師1人・数学教師1人・助教3人が在籍しており、省三郎と繁平は共に助教の職位であった。
- (8) 前掲注（7）「小学義校開業願書」
- (9) 『柳津町史 佐波編』（1972年）266頁

## 特集展示

# 加藤栄三・東一と 日本画の変遷

2024.9.21(土)~11.17(日)

安政6年(1859)横浜開港から始まった文明開化により技術、政治と共に文化までもその煽りを受け、日本の絵画作品は、時代の経過とともに受け継がれてきた日本画と、写実の中で培われた西洋絵画という両者の立ち位置を明確に区別する必要に迫られました。

明治20年(1887)、日本古来の美を学び、保存することを目的とした東京美術学校の設立は、このような日本画と西洋画を区分するきっかけになり、後に明治40年(1907)から始まった日本芸術院管轄の文部省美術展覧会(現日展)において、日本画と西洋画ははっきりと区別されました。



加藤栄三「月響 (大下絵)」  
(昭和23年(1948) 加藤栄三・東一記念美術館蔵)

1950年代になると、西洋画というジャンルの絵画表現を念頭に置きつつ日本画はその方向性を模索するようになります。

そんな時代の中で結成された「瑠爽画社」と、その姿勢を受け継ぎ第6回展より東一が出品を始めた「一采社」は次世代日本画の一端を担うグループとして注目を浴びました。

昭和22年(1947)、山本丘人は二大勢力の一

つ日本美術展覧会の審査員を務めました。審査時に感じた権威主義的審査方法や受賞の選考に関して不満を覚え、翌年の昭和23年(1948)1月、加藤栄三、福田豊四郎、橋本明治らとともに新規の団体公募展「創造美術」を創設しました。創造美術の創立会員は日本画の将来に向けて、作家として、求道者としてその精神を具現化していくという課題に取り組み、大衆生活から離反した日本画自体の存在が批判される中、翻弄されながらも変革を受け入れ活動を続けました。



加藤東一「池畔にて」  
(昭和35年(1960) 加藤栄三・東一記念美術館蔵)

1940年代、写生派として大衆に受け入れられていた日本画は時代の感覚からずればじめ、画材や技法を含めた伝統絵画の継承から主体的な表現への変革を強いられていきます。俗にいう日本画滅亡論です。あわせて新岩絵具などの新しい材料が開発され、日本画材は西洋画に使用される材料と併用が可能になったことで、ジャンルとしての定義が定まらないまま今日まできました。

今回、1930年代後半から1950年代にかけて日本画と呼称された絵画表現の変遷の中で、栄三・東一がいかに時代と対峙し画風を変えたかについて、同時代に活躍した日本画家とともに日本画表現の変貌を紹介します。また、二人の絵画表現を追いかけながら、ゆかりのある作家と同時代に活躍した作家についても紹介します。

# 展覧会情報

本誌 2、3 ページ、6 ページで紹介した以外の本館・分室の展示は以下の通りです。

## 本館 1 階特別展示室

- 12月13日（金）～3月9日（日） 企画展「ちょっと昔の道具たち」
- 3月29日（土）～ 企画展「実りの考古学」

## 特集展示（2階総合展示室内）

2階の総合展示室の一角に特集展示室を設置し、1～2か月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。これからの日程は次のとおりです。

- 11月23日（土）～1月26日（日） 「別府細工」
- 2月1日（土）～3月2日（日） 「江戸時代の町人文化」

## 分室 原三溪記念室の展示

- ～10月14日（月・祝） 三溪が見た岐阜の風景
- 10月16日（水）～12月1日（日） 三溪と故郷（ふるさと）・岐阜（予定）

## 利用の御案内

### ■ 開館時間 午前9時～午後5時

（歴史博物館の入館は午後4時30分まで）

※特別展開催中は変更することがありますのでご注意ください。

### ■ 休館日 毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始

（12月28日～1月3日）

（月曜日が祝日の場合はその翌日）

※特別展・企画展開催中は変更することがありますのでご注意ください。

### ■ 観覧料

高校生以上…310円（団体250円）

小中学生 …150円（団体 90円）

特別展を観覧される場合

高校生以上…500円（団体400円）

小中学生 …250円（団体200円）

※団体は20人以上

※下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。（ミライロID可）

①岐阜市在住の70歳以上の方（特別展を除く）

②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳、難病に関する医療受給者証の交付を受けている方、及びその介護者1人

③家庭の日（毎月第3日曜日）に入館する中学生以下の方

④③に同伴する家族（高校生以上）の方（特別展を除く）

⑤岐阜市内の小中学生

※原三溪記念室は、無料でご観覧いただけます。

### ■ 交通案内

JR 岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、徒歩約5分。

お車でおこしの際は、岐阜公園駐車場をご利用ください。

詳しくは岐阜市歴史博物館ホームページをご覧ください。

<https://www.rekihaku.gifu.gifu.jp/>



### ◀原三溪記念室▶

岐阜バス西部三田洞線 下佐波及びカラフルタウン行きに乗り、「下佐波」で下車、徒歩2分。

岐阜バス西部三田洞線 もえぎの里及び高桑行きに乗り、「もえぎの里」で下車。

博物館だより No118 2024.10

編集・発行 岐阜市歴史博物館

（分館）加藤栄三・東一記念美術館（R6.6～休館中）

（分室）原三溪記念室

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1 ————— ☎058(265)0010

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46 ————— ☎058(264)6410

〒501-6121 岐阜市柳津町下佐波西1-15 もえぎの里2階 — ☎058(270)1080

## 館蔵資料紹介

### 加藤栄三 作「星夜」

号数：194.0×112.0

制作年：昭和42年（1967）

形態：紙本、彩色 額装

#### 【作品解説】

昭和42年8月9日、加藤栄三は長女：美耶子、高弟で日本画家の石川響とともにイタリア周辺を巡る約50日間の写生旅行に出かけます。ローマ、ペルージャ、フィレンツェ、アッシジなどの古い街並みを中心に遍歴した後、パリからロンドンを経て9月28日に帰国します。

本作品はイタリア旅行中に訪れたサン・フランチェスコ大寺院を描いた作品で、帰国した後、第10回新日展に発表されました。



### 絵日傘

制作年：昭和30～40年代

直径85cm 全長74.4cm 親骨長41.4cm

岐阜市歴史博物館所蔵（令和5年度受贈資料）

#### 【作品解説】

無地の糸入り紙を張り、満開の桜と五重塔を手描きで入れた絵日傘で、江戸時代から和傘の産地として知られた岐阜市加納で作られた製品です。軒（親骨の先端）は2本の軒糸を親骨と親骨の間毎に交差してかけ、平紙の先は交差した軒糸に沿って谷形に折り込み「網代」に仕上げられています。柄は手元の部分に竹根を残して作った「根竹柄」で、木製の木ハジキをつけた36間（骨数が36本）の手の込んだ傘です。このような絵日傘は昭和初期から40年代にかけ、スーベニアグッズなどとして国内外で好評を得てきました。

